実践的、効果的な交通社会の構築を目指す学会として

学際的課題である交通安全の研究と啓発・普及活動の在り方

長江啓泰　Hiroyasu NAGAE

日本大学名誉教授

阪神・淡路大震災から東日本大震災を経験する中で、絆、思いやり、親切、ありがたさなどの言葉がテレビやラジオから盛んに聞こえてくるようになった。新聞や雑誌でも同じ言葉が目に入ってきた。人間が社会の一員として生活するに当たっては、ごく当たり前のことと思えるが今更なぜだろうかと考えた。

IT関連の製品が次々と世に出回ってきたが、これらの製品によって特に若い人々は一人で楽しみ、周囲の人とのつきあい方にも変化が見られるようになった。社会の規範も明確ではないが、個人がさまざまな思い込みで日々の生活を送っているように思える。当然のことながら、他人が何をしようが自分とかかわりがなければよしとする人情味の薄い世の中となったといえる。

しかし、そのような嘆かわしいと思われる日本でも、震災等が発生すると、なぜ日本人は我慢強く順番を待ち、整然と振る舞えるのかと外国人の目に映る驚きの声を聞くと同時に、海外で起きる暴徒の破壊行為の報道には解せない感を強くすることも事実である。

冒頭に記した人の気持ちを思いやり、行動することは安全で安心できる交通はもとより、より良き社会を構築することが可能であることを示唆しているといえる。

交通問題はまさに学際的な問題であり、人々が生活する各分野の問題が含まれている。したがって、これらの問題解決に当たっては、当然のことながら研究活動での成果と、それを実践するための人々への働きかけがなされねばならない。

時代の移り変わりとともに、研究者のターゲットもより専門的に細分化された問題を取り上げ、独創性を担保するようになった。製品化された機器は一人一人が楽しみ、その良さを独自の基準で評価するようになった。そのような人々に交通安全を働きかけるには、さまざまな働きかけを行う方々に理解してもらうことが必要であろうことは言うまでもない。

国際交通安全学会は、当初は文系、理系の研究者が入り交じって交通とその安全問題を討議した。その際に、まず問題になったことは用語の使い方が文系と理系で異なることから、双方が理解できる用語の確認から始まったと聞いている。現在では過去に比べ分野が多方面に広がり、多くの略語を用いられるようになった。研究段階での用語の使い方については、何ら問題はないが、外部報告会ないしは発表文献では、是非参加者が理解できる言葉を用いて行っていただくことを切望する。

用語が平易であることが研究の独創性やレベルを下げるという心配はないはずであり、働きかけへの問題発見につながることも考えられる。是非共ご配慮いただければ幸いです。

一貫して二輪車の運動力学と安全教育の研究を続け、定年退職後は財団法人の理事ならびに理事長、学校法人長崎日本大学学園の理事長等を経て現在に至る。（顧問／1981年会員就任）